

地域情報（県別）

【奈良】小児科医として児童虐待防止活動を25年以上継続、第75回保健文化賞受賞-岡本和美・岡本内科こどもクリニック医師に聞く◆Vol.1

子どもを見守る体制を充実させるため「こどもそうだん隊」設立を発案

m3.com地域版

岡本内科こどもクリニック（桜井市）の小児科医として地域の子どもたちの健康づくりに貢献している岡本和美氏。2023年には児童虐待防止活動が評価され、第75回保健文化賞を受賞した。児童虐待防止活動に取り組むようになったきっかけや育児支援の講演会で話していること、地域で子どもを見守る体制を充実させるために行っていることなどを岡本氏に聞いた。（2023年2月28日インタビュー、計3回連載の1回目）

▼第2回は[こちら](#)（近日公開）

▼第3回は[こちら](#)（近日公開）

——第75回保健文化賞では児童虐待防止が評価されましたが、活動を始めたきっかけを聞かせてください。

私が児童虐待防止に関わるようになったきっかけは、1997年に桜井市医師会の理事として桜井市母子保健推進会議の会長に就任したことでした。桜井市母子保健推進会議は母子保健をテーマとし、母と子にとって住みよい街づくりを議論することが主な目的でしたが、私は真っ先に育児に関する実態調査を行いました。

桜井市の担当職員は、「児童虐待が大きな社会問題になっているというわけでもないのに、児童虐待とは無縁の会議で、この会長はなんで児童虐待ばかり言うのだろう」と困惑していたようですが、調査を実施したことで、児童虐待の背景にあるお母さんの精神不安、心の叫びを知ることができ、これは対策が必要だと考えるようになりました。



岡本和美氏

——育児に関する実態調査の内容と結果を教えてください。

育児に対する実態調査は、桜井市での乳児健診と私自身が運営している岡本内科こどもクリニックで乳児健診を受診した父親を含む保護者、さらに当時理事であった奈良県医師会とで、計約3000人を対象とした大きな調査になりました。

その結果、育児期間中のお母さんの心理状態では、「生まなければよかった」「子どもがかわいくない」「生後1カ月の新生児をたたく」「殺してしまいたい」「早く楽になりたい」など驚くべき意見があり、お母さんが抱える育児の苦勞と悩みが浮き彫りになりました。私は5人の育児をしてきたので、お母さんの苦勞が理解できる部分もあり、育児の悩みと児童虐待は紙一重、表裏一体だと感じました。そこで、まずはお母さんの育児支援に力を注ぐことが重要だと考えるようになりました。

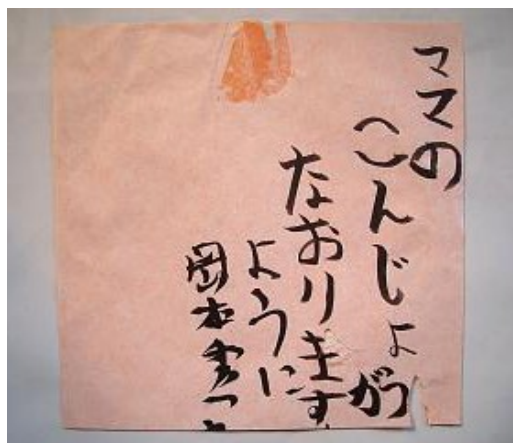


岡本内科こどもクリニック

——現在、母親の育児支援では、どんなことを行っていますか。

児童虐待と育児支援に関する講演を奈良県全域で請われるまま行っています。講演では、私自身が5人の子どもを育ててきたこと、親と子どもたちとで感動と思い出を共有することを大切にしてきたこと、子育ての苦労と悩み、自分の育児は正しいと思っていたがある時に長男が七夕の短冊の願いに「ママのこんじょうがなおりますように」と書いてハッとしたこと、「あっちに行きなさい」と言っていたり、もしかしたら虐待に至っていたかもしれない出来事、子どもが親のことを大切に思っていることに気づかず反省したことなどを、たくさんの家族写真を見てもらいながら話しています。

講演の最後には、子育ては山あり谷ありで100点満点はないこと、子どもの存在が大切なものであること、そして子どもを抱きしめ愛情を伝えることが最も大切だということを伝えています。私の経験に基づいた話は、お母さんから共感が得られ、思わず涙ぐむ人もいらっしゃいます。児童虐待を防ぐためには、お母さんの精神を安定させることが一番大事だと思っています。



長男が書いた七夕の短冊

——児童虐待防止で行っていることも教えてください。

桜井市に児童虐待防止対策を働きかけ、2003年に桜井市児童虐待防止ネットワーク会長に就任しました。さらに2008年には桜井市要保護児童対策地域協議会会長に就任し、現在まで児童虐待防止活動を続けています。

児童虐待は将来の非行問題など当該児の一生の問題であり、子どもの成育を取り巻く全ての環境に目を向け、そのためには多方面への対策と協力・支援が必要と考えるにいたりしました。健全な育児のためには、(1) 母親の心身の安定が最重要と考え、育児支援、地域の協力 (2) 働く母親には職域環境改善、男性の理解・協力体制 (3) 幼保教育機関には幼少期からの命の教育 (4) 青少年には将来の親教育、性の保健指導 (5) 医療機関には早期発見の場との認識、連絡体制整備 (6) 警察、救急、児童相談所、関係機関への知識の徹底 (7) 一般市民に対しての啓発、通告の協力など、広い分野に活動を展開していきました。



児童虐待の広義の考えかた図表



チラシ配布で一般市民へ啓発（2024年3月3日）

——地域で子どもを見守る体制の充実に活用してもらうため、桜井市に第75回保健文化賞の副賞100万円を寄贈しましたが、その理由を聞かせてください。

児童虐待に関するポスター掲示やビラ配り、講演会などを通して桜井市民への啓発活動を行っていることもあり、市民の理解が次第に深まり、児童虐待の通告も増えてきています。現在は、見守り体制として民生委員の方々の協力も大きいですが、児童虐待のリスクがある家庭を24時間見守ることは不可能です。

そこで私は、仕事や育児が終わってから時間のある人、会社を退職されてもまだまだ元気な人、現在教職についている人やかつて教師だった人など、地域での協力者を募り、どなたでも参加できる「こどもそうだん隊（仮称）」の設立を提案しました。

活動の真意は、見守りや見廻り、児童虐待防止ですが、表向きは子どもたちからの相談やお母さんからの育児相談などに対応することを活動目的にします。その中で気になる子ども、例えば、季節にそぐわない格好をしている子どもやいつも同じ服を着ている子ども、お風呂に入っておらず髪の毛を洗っていない子どもなどを早期に見つけて観察していきます。「こどもそうだん隊（仮称）」の隊員は、すぐ分かるように「子ども相談」などと書かれた専用のベストを着用して気軽に声をかけてもらえるようにし、時間の制限なく多様で自由な活動をしてもらいます。



桜井市要保護児童対策地域協議会のキッズSOSシンボルマーク(岡本和美作)

私が会長を務める桜井市要保護児童対策地域協議会では、「こどもそうだん隊（仮称）」の活動についての承認を得られたので、現在は連絡体制の整備などの準備を進めています。隊員を募集するためのポスターや活動時に着用するベストなどの準備、桜井市の市長による認証式を年1回開催することなども考えているので、そのための予算として今回の保健文化賞の副賞100万円の全額を桜井市に寄贈しました。

桜井市の賛同も得られ今後の市からの援助も期待できるところですが、私も経済的援助も含めこれからも惜しむことなく協力していくつもりです。桜井市でのささやかな活動のスタートが成果を上げ、全国津々浦々に広がり、児童虐待防止のさらなる徹底につながればと夢が膨らんでいます。

◆岡本 和美（おかもと・かずみ）氏

1972年に奈良県立医科大学を卒業し、東京慈恵会医科大学小児科学教室助手、国立小児病院（現、国立成育医療研究センター）感染・免疫・アレルギー科。1981年天理よろず相談所病院小児循環器科、1986年奈良県立医科大学附属病院病態検査科非常勤講師、1980年から岡本内科こどもクリニック。医学博士、日本小児科学会認定小児科専門医、日本感染症学会認定感染症制御ドクター、桜井市要保護児童対策地域協議会会長、桜井市こども子育て会議会長、元・奈良県医師会理事、元・奈良県教育委員長。

【取材・文・撮影＝竹花繁徳（写真はクリニック提供）】

記事検索

ニュース・医療維新を検索

